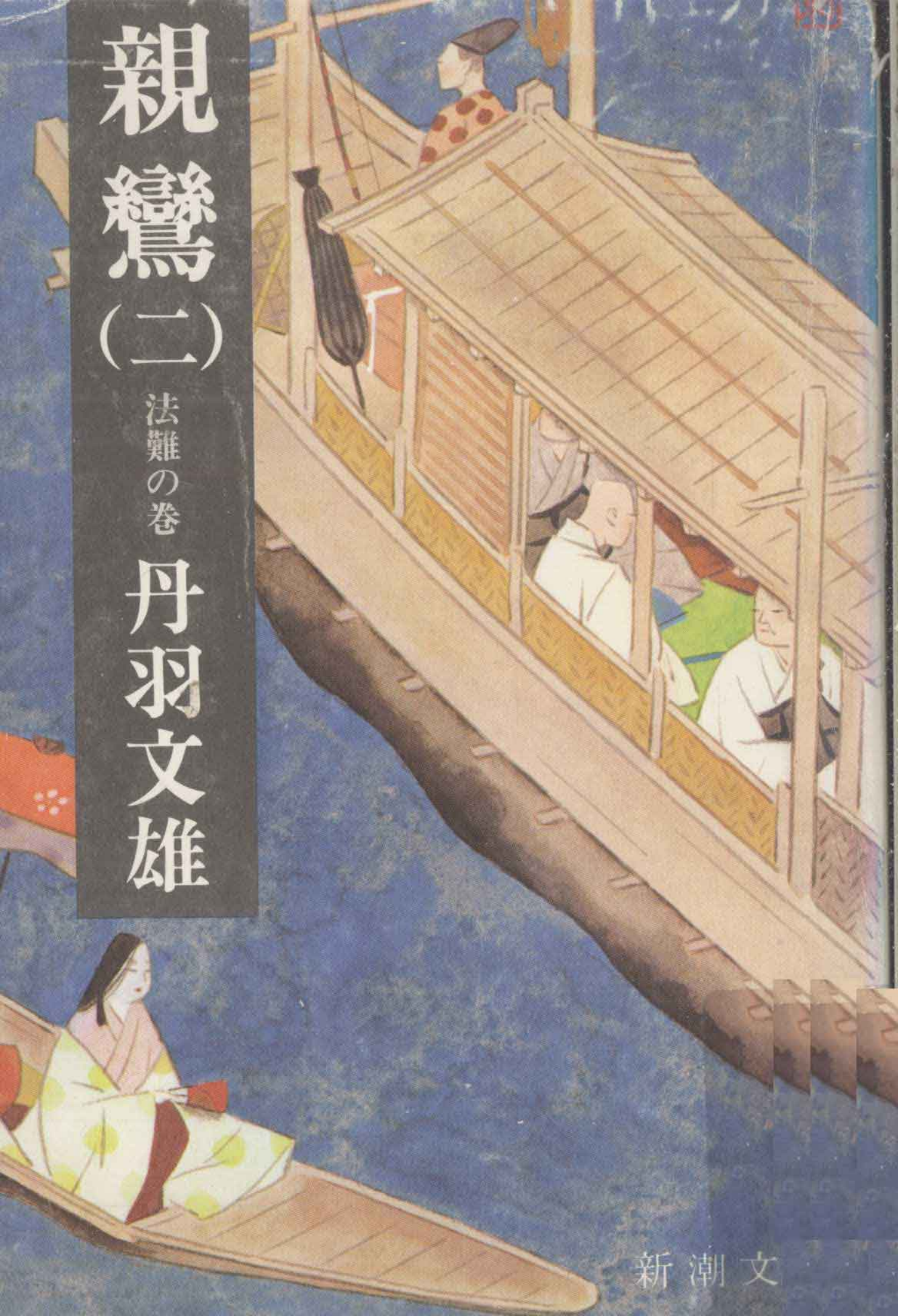


親鸞(二)

法難の巻

丹羽文雄



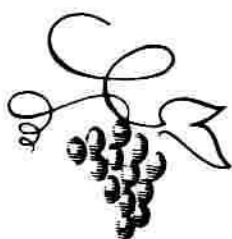
新潮文

しん
親

らん
鸞 (二) 法難の巻

新潮文庫

に - 1 - 15



昭和五十六年九月二十五日 発行
昭和六十年七月五日 四刷

著 者 丹 羽 文 雄
に わ ふみ お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一―一

編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊟ 印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Fumio Niwa 1981 Printed in Japan

ISBN4-10-101715-8 C0193

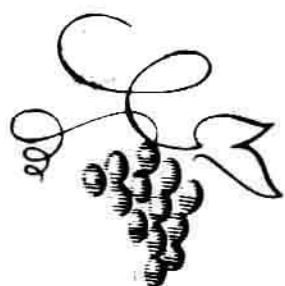
庫

親

鸞

(二) 法難の巻

丹羽文雄 著



新潮社版

2765

目次

六角堂参籠	七
吉水入門	一〇七
禅室のひとびと	一二〇
最初の法難	三一一
親鸞受難	三六二
越後	四〇六
運命の出会い	四八

親

鸞

(二)

法難の卷

六角堂参籠

範宴は不断念仏の招聘をうけて、山を下りると、必ず承子の家をたずねるようになった。が、いつも必ず承子がいるというわけではなかった。いないときは、堀川の五郎七の家に出一向していた。一家の生計をすこしでもたすけようという承子のけなげな心根が、範宴にはけなげなものに思われた。大ていの娘は、親や男たちにくらしのことは任せきりで、女の身でそんなことをしてはならないと考えているようであった。しかも、承子は町屋の娘でもなかった。

土門をはいるとき、範宴は期待から胸苦しくなるほどであった。このごろは、承子は土門の前に佇んでいることがなくなったが、範宴の来ることが、何となくわかるようであった。承子と話をするのが、愉快だった。承子からうける感じは、これまでの範宴の生活の中にないものであった。それはあたたかく、やさしく、ほのぼのとした感じであった。いい匂いがしていた。承子のような年齢の女性が一般的にもっているものかも知れなかった。範宴は、五郎七の息子の妻の絹女と向いあって話をしているときにも、ほのぼのとしたあたたかなものを感じた。若い女の特権のようなものである。清水に詣でたかえり、誘われて出向いた、大きな邸の不可解な女性にも、おなじものを感じた。

——あのひとは、多分殺されたであろう。

範宴はひそかに供養することをわすれなかったが、女からうけた印象は強烈なものであった。女の告白で気持ちを動転させ、つぎにはわがいのちまであぶなくなったことから、女の印象は特別なものになった。美しいひとではあったが、それは承子からうける感じとはちがっていた。承子の感じは、したしみやすかった。範宴が手をのばせば、容易にとどくところにあった。兄の柳原康行と、一度顔を合わせた。妹からきいていたとみえて、兄の態度は範宴を窮屈にさせなかった。いいひとだと範宴は思った。

「堀川のようにご馳走は出来ませんけど、でも、お泊めすることぐらいは出来ます」
承子が誘うのだったが、泊るとなると、やはり五郎七の家で世話になった。

「私、お百姓のまねもします」

誘われて裏庭に出ると、畑がつくられていた。

あるとき、範宴が土門をはいつていくと、裏庭あたりで承子と年齢をとった下人の女との会話がきこえた。範宴は、そちらへまわった。承子が素足になって、土を踏んでいた。土がどのよりも黒くみえた。承子の足が白かった。

「私も手伝いましょう」

範宴は法衣の両袖を結ぶと、器用にそれに袂たもとを入れ、背中にまわした。

「お坊さんの稚児さんが、黄金こがねを生んだ話をご存じですか」

承子が笑いながらいった。

「稚児さんがですか」

範宴はからかわれていると思った。承子はいろんなことを知っていた。五郎七の家に出入りするようになってから仕込まれたのであろうか。年齢をとった下人の女がきかせたことだろうか。承子は親しくなると、範宴にいろんなことを話すようになった。

「比叡のお山のある寺に、ひとりのお坊さんが住んでいたのです。立派な学生がくしょうだったのですけど、京に出て、雲林院というところに住んでいました」

「いつのことですか」

承子が首をふった。

「そのひとは大へん貧乏で、両親もなく、訪ねてくるひともない。心細いくらしだったのです」
延暦寺えんりやうじに属しておれば、食べることに困らないが、独立すれば、保護者を持たねばくらしに困るのは、いまも昔も変りはなかった。

「そのわびしさをなぐさめたいと思って、お坊さんは鞍馬寺くらまに参詣さんけいして、祈っていたのです」
範宴は、話よりも承子の唇の動きに気をとられたが、次第に話の筋にひきこまれた。

「九月の中ごろのことだったのです」

鞍馬寺にまいったのかえりみち、出雲路いずもじのあたりまで来ると日が暮れたという。僧は、貧相な小坊主をひとりつれて歩いていった。月が出ていた。一条の北の小路にさしかかったときである。二人が歩いているそばを、十六、七の少年がいっしょに歩いている形になった。僧は、少年をみた。顔かたちが美しく、白い着物にしどけなく帯をしめているのも、少年にはふさわしく思われて、美しかった。どこかのかえり道であらうか。が、供に法師ひとりもつれていないのは不思議

であった。どういいうわけだろうと思っていると、少年の方から近寄って来た。

「お坊さん、どちらへおかえりですか」

「雲林院というところへかえります」

「それでは私も、そこへつれて行って下さい」

僧はあらためて少年の顔をみた。

「どのどなたか、名前も知らない方をおつれするなんて、非常識なことです。いったいどこへおかえりになるのですか。師のご坊のところですか。それともお母さんのところですか。つれていけといわれるのは、うれしくないこともないが、あとからかれいわれては困りますからね」

親

「そう思われるのも、無理もございません。長年親しくしておりましたお坊さんと仲たがいをし、とび出してしまいました。この十日間、どことなくうろついてました」

少年がしんみりと答えた。

僧は、哀れに思った。

「私は、幼いころに両親に死に別れました。よるべない身の上でございます。不憫ふびんに思ってください。私があれば、どこへでもつれていっていただきたいと思います」

「うれしいことをいわれる」と、僧はいとしい思いを抑えかねた。ひとのきこえがどうあろうと、かまわない。格別私の罪というわけでもない、はらをきめたが、「だけど、前もって断わっておきますが、私の住んでいる坊には、気の利かない小坊主がひとりいるだけで、ほかにだれもい

鸞

ない。きっと退屈な思いをなさると思うが」

話しながら歩いていると、僧の気持はいよいよこの少年とはなれがたくなった。少年は、ことのほか魅力があった。つれだって雲林院にかえって来た。

さて、明りをつけてみると、少年は色が白く、ふっくらとした顔立で、可愛くもあれば、気品もあった。僧はうれしくなった。下々の子供ではないと思われた。

「そなたの父御は、何というお名前か」

少年は答えるのをしぶった。僧は、強いて訊ねなかった。

寝所などもふだんよりはきれいに片付けて、少年を寝かせることにした。僧はそばに横になって、よもやま話にときをすごした。少年はやがて安心をしたように眠った。

夜が明けると、隣近所の坊にいる僧たちが、少年をみかけて、

「何という美しい稚児さんか」

「これほどの美しい稚児をみたことがない」

「目がさめるようだ」

評判になった。

僧は、少年をひとびとに見せるのが惜しくなった。縁先にもあまり出さないようにして、ひと間にこもって、可愛いとばかり思っていた。

その日が暮れると、僧は少年を抱きよせて、白いふっくらとした頬に自分の頬をすり合せたり、馴々しいふるまいに出た。少年は僧の気持をうけ入れて、されるままになっていた。ところが、

僧は合点のいかにことに気がついた。僧はあくまで相手を可愛い稚児とばかり思っていた。

「私はこの世に生れてから、母のふところに触れたことのほか、女の肌というものには触れたことがない。だから、よくわからないのだが、どうもふつうの稚児さんとはどこかちがったところがあるようだ。どういうわけか、いままでに一度もおぼえなかったような夢心地になる。心がとろけてしまいそうになる。もしかすると、そなたは女ではないのか。それならそうだといってほしい。こうなった以上は、そなたと別れることはとうてい出来ない。ただ、ほんとうのことが知りたい。そのことだけが気にかかる」

少年は自信ありげに、

「もし私が女でしたら、よくないことでもございますか」

「もしも女のひととつれ添うことになれば、世のひとのそしりもいかがかと思われる。遠慮しなければならぬかも知れない。み仏の心に叛くことになり、そらおそろしい」

「み仏は、女と知って近づいたのなら、お叱りにもなりましょう。それに、世間は稚児をつれているとしか見ていないでしょう。たとえ私が女であったとしても、稚児さんを相手にしていられるようになさっておれば、それでいいではございませんか」

さもおかしそうに笑った。

やはり女だったのかと、僧はおそろしくもあり、はらだたしくもあった。といって、身にしむばかりのいとしさを断ち切るわけにいなかった。相手が女性であるとわかれれば、抱いて寝ることとはできない。僧は衣をへだてて寝ることにした。が、そんなことは何の役にもならなかった。

僧もやはり凡夫ぼんぶであつた。稚児を粧よそおった美しい女がそばに寝ているのだ。ついよしみを通じることになった。女はそれを待っていたようであつた。

僧は、どのような稚児とくらべてもこれほど可愛いものはあるまいと、日ましにいとしさが増した。女と契ちぎることになったのも、何かの縁であつた。隣近所の僧たちは、噂をした。

「貧乏な坊主のくせに、どうしてあんな美しい稚児が買えたのだろうか」
女人禁制にょにんきんぜいの看板の下に、稚児を買うことは大目にみられていた。

その内に、稚児の気分が何となくすぐれなくなった。はきはきとした動作がなくなり、食事もすすまなくなった。僧が心配した。

「身ごもったようでございます。そのおつもりでいて下さい」

僧は、うろたえた。

「表むきは稚児さんということですが、とんでもないことになった。赤んぼうが生れるというのは、いったいどういうことになるのか。どうすればいいのか」

「あなたは心配なさらくともよろしい。あなたを困らせるようなことはありません。いよいよのときには、さわがずに、じっとしてして下さい」

けなげなことをいう。僧は、いっそう心苦しかった。気をもみながら、日が経つうちに、やがて月が満ちた。稚児もさすがに心細くなったのだろう、哀れなことを口走りながら、さめざめと泣いた。

僧はその背をやさしく撫なでながら、いっしょに悲しい思いにひたっていると、稚児ははらを押

えて、

「生れそうな気がします」

僧は、うろたえた。

「そんなにさわがないで下さい。どこぞの壺屋つぼや（物置）に畳を敷いて用意して下さい」

僧はいわれるままに壺屋に畳を敷き、稚児が中にはいった。僧が壺屋の表で、不安のあまりそこらをいったり来たりしていると、やがて赤んぼうの産れたような気配があった。お産は、坐産である。中腰のまま産みおとすのである。産れた土地の神をもって産神うぶがみとするならわしであった。僧はほっとして、壺屋にはいった。稚児の着物で、赤んぼうが包まれていた。僧は、わが目を疑った。せまい壺屋のどこにも稚児のすがたがなかった。赤んぼうは泣き声をたてなかった。

不思議に思い、そばに寄って着物の中をみると、赤んぼうはいなかった。産れた赤んぼうの代りに、枕ほどの石が置かれていた。僧は、その場に腰を落した。が、目の前の現実をみとめねばならなかった。僧は赤んぼうが石に化したと思い、両手にもって壺屋の外に出た。はじめは黄色な石だと思った。石にしては重かった。よくよくみると、枕ほどの石は黄金であった。

稚児はそのまま消えた。僧は、稚児の思い出を恋い慕った。

「これも鞍馬の毘沙門天びしゃもんてんが、自分をたすけようとして功德をほどこされたものだ」
そう考えるようになった。

僧はその黄金こがねの石をすこしずつ削って売った。次第にゆたかな身の上になった。

「はじめは黄金こがねといていたのを、このことから子金こがねというようになったのですわ」

語り終えた承子が笑った。

「だれからそんな話をきいたのですか」

「そのお坊さんの弟子の法師が語りつたえたものといひます。毘沙門さまの靈驗あらたかなお話ですわ」

物語はたあいまいな仏教信仰にかかわるお伽噺ときばなしであつた。黄金の石をひとり占めにするのもおかしいが、毘沙門も手のこんだ功德をほどこしたものだ、滑稽に思った。範宴が刺戟しげきをうけたのは、承子のいかにも男女のよしみに通じているような口吻くちぶりであつた。まるで経験者のように人情の機微に通じていた。承子は範宴にくらべると、はるかに世間を知っているようであつた。

——何故なぜこのひとは、私にこのような話をするのか。
そのことに、範宴はこたわつた。

月が変り、範宴は不断念仏の招聘をうけて山を下りた。その寺を出たのが、夜に近い時間であつた。承子の家の前をとつた。承子はいなかつた。五郎七の家に泊るよりほかはなく、堀川に向けて歩いていけると、途中で承子と出会つた。

範宴をみかけると、承子が駆けてきて、いきなり手をつかんだ。

「やっぱりお目にかかれた。何だかそんな気がしてました。今日は範宴さまがお山を下りて来られるという気がして、堀川にいても落着かなくて、いつもより早くかえることにしました。やっぱり私のかんはあたるんです」

範宴は、周囲を気にした。町中で、若い女に手をにぎられた若い僧のすがたは、興味を呼ぶに